

老年期にある浄土真宗門信徒の死への態度と宗教性

川 島 大 輔

1. 問題と目的

老年期において人間は自らの肉体の衰えに対する自覚や、頻繁に親密なる他者や愛すべきものとの別れに直面することで、その傍らに近づきつつある死の足音に序々に耳を傾けるようになる。つまり老年期を生きる個人は自ら一人でこえねばならない死の谷の入り口に立たされているのである (Erikson, 1964: 133/ 1971: 131)。それ故、この時期において死と有限性が重要な主題となることは必然である (Ranst & Marcoen, 2000: 67)。

それではこの人生の最終的段階において、個人は如何に死の怖れに対処し、そして死を意味するものとして受け入れているのであろうか。川島 (2005) はわが国の高齢者の死の意味づけ¹⁾に関する研究を概観し、各尺度によってその概念構造は異なるものの、死そのものと死に逝く過程への怖れ、死後への肯定的な意味づけ、人生に対する無常観の3つが概ね共通して見られると述べている。しかし併せて川島 (2005) も述べているように、研究量が不十分なためそれら3つの共通要素も引き続き検討が必要である。

ところで死への態度を扱う際に重要なことは、その概念構造とともに、それが如何なる要因によって影響を受けるのかという問題であろう。川島 (2005) が概観しているように事実これまで多くの関連要因が報告されてきているが、本研究ではとくに宗教との関係性に焦点を当てる。何故ならば、死の不可避性から逃れるため、「人類の歴史を通じて、もっとも広く行われた工夫は、人間の死後に、理想世界を描き出すこと (岸本, 1973: 133)」であり、その死後世界を説くことで死への怖れを緩和させるという役割を担ってきたのは他ならぬ宗教だからである。そしてそれは高度な科学技術が発展した現代においても尚、考察に値し得るものであり、特に幼少より生活のあらゆる場面において素朴で豊かな信仰の中に育ってきた現在の高齢者にとって、宗教とはまさに生活の一部あるいはそれ以上の存在であるともいえる。それ故高齢者に関する臨床現場から宗教に対し寄せられる期待は少なくなく、終末医療の現場などにおける宗教的ケアの実践に必要不可欠である、高齢者が宗教と死に対し如何なる態度を有しており、かつ両者はどのように関連しているのかを明らかにすることが求められている。

それではこれまで両者の関係は如何に扱われてきたのであろうか。宗教と死への態度、とくに死の怖れとの関係性は最も長く焦点化されてきた問題であり、多くの研究知見は両者の密接な関係性を示唆している (e.g. Neimeyer & Van Brunt, 1995)。この関係性は高齢者を対象とした調査でも見出されており、例えばThorson & Powell (1990; 2000) は高い内発的宗教性が死の不安を減じることを報告している。またTomer & Eliason (2000) は、宗教への傾倒は有意味性の感覚を向上させ、死の受容を促進すると述べている。しかしわが国においては得られる知見

が一貫していない。その理由としては、川島（2005）が述べるように次の問題点が挙げられる。すなわち第一には個人の宗教的関りの有様を十分に捉えていなかったことが挙げられる。別言すれば宗教が如何に信仰されているのか、つまり個人の宗教性の多次元性を把握していなかったのである。とくにこれまでの研究において、宗教性の相異なる側面である、礼拝や宗教的活動への参加といった宗教行動と、宗教に対する個人の信念が混同されていたことの問題性は多くの研究者によって指摘されており区別が必要である（e.g. Neimeyer & Fortner, 2001; Fortner, Neimeyer, & Rybarczyk, 2000）。第二には特に欧米においてキリスト教との関係性について多くの研究知見が集積されているのに対し（e.g. Ardeelt, 2003; Thorson & Powell, 1990; 1994; 2000）、わが国の宗教に多大な影響を及ぼしている仏教と死への態度との関係性は十分に明らかにされているとは言い難い。第三には金児（1995, 1997）が示唆するように、明示的な教義に対する宗教性が焦点化される一方で、土着の自然宗教や民間信仰といった所謂民俗宗教からの暗黙裡の影響を十分に掬い得ていなかった。そして第四には川島（2004）が指摘するように、老年期における宗教への関り方は生涯に亘る宗教との関りの所産であるという生涯発達の視点がこれまでの研究においては十分に考慮されていないのである。

なお本研究では、次の理由より老年期にある浄土真宗門信徒に焦点化した。すなわち第一には極楽浄土の思想を通じて日本人の心性に深く影響しているためであり、また第二には宗教的ケアの直接的受け取り手の代表者である門信徒の死への態度および宗教性の実態を明らかにすることで実践現場に対し有意義な示唆を提供できるためである。

上記の問題点を鑑み、本研究では高齢者、とくに老年期にある浄土真宗門信徒の死への態度および宗教性の概念構造とは如何なるものであるのか、そして両者の関係性はどのようなものであるかを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2-1. 質問紙の作成²

死への態度尺度

死への態度尺度にはDeath Attitudes Profile-Revised (DAP-R : Wong, Reker & Gesser, 1994) と Revised Death Anxiety Scale (RDAS : Thorson & Powell, 1994) を採用した。両尺度を用いたのは、これまで殆ど考慮されてこなかった理論的背景について、人生最終段階についてのEriksonの実存的視点に基づく考察を行ない、作成された希少な尺度（e.g. Gesser, Wong, & Reker, 1987; Thorson & Powell, 1994; Wong, et al, 1994）だからである。ただしDAP-Rは死の否定的側面、とくに恐怖を一次元で測定しているためにその多様な側面を十分掬い得ておらず、また一方のRDASも多様な死の不安を把握できるものの死の肯定的側面は捉えていないことから、2つの尺度を併用することで死への態度の多次元的把握を志向した。具体的には、肯定的側面に関してはDAP-Rの「接近的受容Approach acceptance」、「逃避的受容Escape acceptance」、「中立的受容Neutral acceptance」の3因子（Clements & Rooda., 1999-2000; Wong, et al, 1994）を、否定的側面に関してはRDASの「非存在Nonbeing」、「痛みPain」、「後悔Regret」、「身体Body」の4因子（Tomer, Eliason & Smith, 2000; Thorson & Powell, 1994）を採用した。

なお回答への負担を軽減するため各因子を構成する項目を抜粋し、最終的に死への態度尺度を作成した。³詳述すれば、死への肯定的態度についてはWongら（1994）において高い因子負荷量が報告されている各7つ、3つ、3つを、否定的態度についてはTomerら（2000）の高齢者を対象とした調査の結果抽出された、各6つ、3つ、3つ、3つを採用し、合計28項目となっている。

宗教性に関連する尺度

宗教性を行動および信念の両側面より把握するため、宗教行動尺度（金児・渡部，2003）と宗教観尺度（金児，1995）を採用した。宗教行動尺度については自己修養的行動、現世利益的行動、慰霊的行動の3つの因子が報告されているが（金児，1995；1997；金児・渡部，2003），本研究では金児・渡部（2003）において因子負荷量が高かったものを抽出し、最終的に9項目からなる尺度とした。宗教観尺度については若干サンプルの特性により項目の変動は見られるが、向宗教性、加護観念、応報観念の3つの因子からなることが報告されており（金児，1995；1997；金児・渡部，2003），本研究では15項目からなる宗教観尺度（金児，1995）を採用した。⁴さらに現在の宗教行動や宗教観から個人の宗教性を把握するとともに、個人がこれまでの人生において宗教に如何に関ってきたのかという生涯発達の視点から個人の宗教性を把握することが重要であると考え、本研究では生涯発達過程における宗教との関り、具体的には公的な宗教教育の有無、宗教的影響の有無、宗教的転換（回心体験）の有無についての質問項目を探索的に盛り込んだ。⁵

2-2. 対象者

2004年11月から3ヶ月に亘り、関西圏内（主として京都、大阪、兵庫県）の老年期（65歳以上）にある浄土真宗門信徒に対する質問紙調査を行ない、135名から回答を得ることができた。なお最終的に分析の対象としたのは回答に欠損の多かったものを除く115名である。⁶

調査対象者の年齢範囲は65～87歳で、平均年齢は75.0（SD＝5.59）であった。老年前期（65～74歳）の人数と老年後期（75歳以上）の人数はほぼ同数であった。また女性が全体の約6割を占めており、女性と比較して男性の方がより高学歴であった。さらに男性は夫婦二人暮らしのものがその半数を占めるのに対して、女性では一人暮らしをしているものが多かった。そのほかの健康状態や年齢について顕著な差は見られなかったが、健康状態は普通以上と答えるものが全体の約8割を占めている。

2-3. 調査方法

質問紙の配布については事前に浄土真宗本願寺派住職に対し研究の趣旨および質問紙の構成についての説明を行なった上で、門信徒への配布を依頼した。とくに本研究では、報恩講などの寺院で催される法会や、定期的に催される仏教講座に参加している門信徒を対象とした。なお、質問紙は郵送により回収された。

3. 結果

3-1. 死への態度

死への態度尺度が如何なる構造により構成されているのかを確認するため、主因子解を求め、プロマックス回転を行い、最終的に4因子を抽出した。第1因子は、死後の世界に対する積極的な

意味を見出す態度である「接近的受容」、第2因子は、死に対する漠然とした不安や心配である「死への不安」、第3因子は死に際の痛みに対する恐れである「死に逝く過程の痛みへの恐怖」、そして第4因子は、苦しみを満たした現実世界からの逃避として死に価値を見出す態度である「逃避的受容」である⁷ (Table 1参照)。「死への不安」を除く3因子を構成する下位項目は先行研究における知見と一致することから、因子名はWongら (1994) およびTomerら (2000) の因子名と対応させた。それぞれの因子におけるCronbachの α 係数は、第1因子： $\alpha = .84$ 、第2因子： $\alpha = .82$ 、第3因子： $\alpha = .78$ 、第4因子： $\alpha = .80$ であり、高い信頼性が確認された。

Table 1 死への態度尺度因子分析結果(主因子法、プロマックス回転)

項目	F1	F2	F3	F4	共通性
<接近的受容>(7項目 $\alpha = .84$)					
22. 死んだら天国(浄土・極楽)へゆくと信じている。	.82	.16	-.12	-.31	.59
4. 私にとって、死は永遠で浄福な世界へ通じる道である。	.72	-.15	.18	.11	.61
10. 死は神と結ばれる(成仏する)ことであり無上の喜びである。	.69	-.03	-.08	.18	.62
1. 死は新たな輝かしい生を約束するものである。	.68	.07	.18	.02	.51
28. 死はすべてが満たされた世界への入り口である。	.67	-.13	.01	.06	.49
13. 死後、愛する人との再会を楽しみにしている。	.45	.21	-.05	.03	.25
19. 死後に確信を持っているので、安らかに死と向き合うことができる。	.42	-.09	-.33	.07	.36
<死への不安>(7項目 $\alpha = .82$)					
5. あの世がどんなものかわからないことが心配だ。	.27	.76	-.02	-.04	.62
14. 死んでしまったら、自分の事をコントロールできなくなるとは考えたくない。	.04	.74	-.29	.03	.39
18. 死後の世界で自分がどうなるかと、私はとても悩んでいる。	-.18	.68	.03	.07	.53
7. 墓の中で自分の肉体が崩壊していくことを考えると、心配になってしまう。	-.11	.63	.27	.09	.70
16. 死んでしまったら、私は多くのものを失ってしまうだろうと感じると、動揺してしまう。	.03	.62	.24	-.03	.61
9. 死んでしまったら、もう二度と意見を変えることができないのが恐ろしい。	.02	.56	.10	-.00	.39
27. 死んだ後、私達に何が起こるのかについて思い悩んでいる。	-.04	.36	.03	.15	.18
<死に逝く過程の痛みへの恐怖>(3項目 $\alpha = .78$)					
15. 手術が必要になるのではないかと考えると恐ろしい。	.04	-.06	.78	-.05	.55
6. 私は苦しんで死ぬのがこわい。	-.02	-.02	.78	.02	.59
24. 死んでいくときに伴う痛みがこわい。	.08	.08	.68	-.09	.51
<逃避的受容>(3項目 $\alpha = .80$)					
11. 私にとって、死はこの世の苦しみからの救済である。	-.04	.07	-.06	.96	.89
20. 死はこの過酷な世界から逃れさせてくれるものだ。	.00	.13	-.11	.68	.47
2. 死は人生の重荷からの救済だと思う。	.33	-.08	.14	.52	.55
平方和	4.41	3.77	1.25	0.95	
寄与率(%)	22.07	18.86	6.23	4.73	

さらに5件法 (1 = そう思わない, 5 = そう思う) による反応得点を因子ごとに合計し、項目数で除した値を死への態度得点とした。Table 2は死への態度の下位尺度の平均値と標準偏差を示したものである。また死への態度の尺度間の関係性を明らかにするため相関係数を算出した (Table 3参照)。結果として、接近的受容と逃避的受容 ($r = .49$; $p < .001$)、および死への不安と死に逝く過程の痛みへの恐怖 ($r = .48$; $p < .001$) の間に中程度の正の相関が見られた。しかし死の肯定的態度と否定態度の間に相関関係は見出せなかった。

Table 2 死への態度尺度の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差	項目数
接近的受容	3.1	0.9	7
死への不安	2.21	0.78	7
痛みへの恐怖	3.1	1.12	3
逃避的受容	2.49	1.02	3

Table 3 死への態度尺度間の相関係数

	死への不安	痛みへの恐怖	逃避的受容
接近的受容	0.01	-0.05	.49***
死への不安		.48***	0.15
痛みへの恐怖			0.11

***p<.001

a 表中の「痛みへの恐怖」は「死に近づく過程の痛みへの恐怖」を表す。

3-2. 宗教性

a. 宗教性の概念構造

宗教行動

宗教行動尺度が如何なる構造により構成されているのかを確認するため因子分析を行ったが、有意な結果を得ることができなかった。そこで先行研究 (e.g. 金児, 1995; 1997; 金児・渡部, 2003) では3つの因子に区別されていることを鑑み、本研究では宗教行動尺度を便宜的に現世利益的行動 (項目番号1, 7, 9), 慰霊的行動 (項目番号2, 3, 4), 自己修養的行動 (項目番号5, 6, 8) の3つの因子に区別した。⁸⁹それぞれの宗教行動について対象者が普段行っていると回答した人数および比率をTable 4に示した。

Table 4 宗教行動への回答 (n = 115)

項目	人数	%
<現世利益的行動>		
1. この1~2年の間に、おみくじを引いたり、易や占いをしてもらったことがある。	21人	18.3%
7. この1~2年の間に身の安全や商売繁盛、安産、入試合格などを祈願しにいったことがある。	41	35.7
9. 初詣に行く。	77	67.0
<慰霊的行動>		
2. 祖先や亡くなった肉親の霊をまつ。	82	71.3
3. 仏壇にお花やお仏飯をそなえる。	105	91.3
4. 神棚にお花や水をそなえる。	68	59.1
<自己修養的行動>		
5. 折にふれ、おつとめをしている。	85	73.9
6. 聖典や経典など、宗教関係の本を折にふれ読む。	62	53.9
8. ふだんから礼拝、おつとめ、布教など宗教的な行いをしている。	64	55.7

さらにそれぞれの行動に従事している場合は1を、していない場合は0として得点化し、各因子の合計得点を個人ごとに算出した。Table 5は宗教行動の下位尺度の平均値と標準偏差を示したものである。

Table 5 宗教行動尺度の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差	項目数
現世利益的行動	1.21	0.96	3
慰霊的行動	2.22	0.88	3
自己修養的行動	1.83	1.00	3

宗教観

宗教観尺度を構成する因子を明らかにするため、因子分析を行い、主因子解を求めた。結果として、若干項目の変動は見られるものの従来同様3つの因子が抽出されたことから、第1因子を向宗教性 ($\alpha = .76$), 第2因子を応報観念 ($\alpha = .81$), そして第3因子を加護観念 ($\alpha = .65$) と

した (Table 6 参照)。向宗教性は一般的な意味での宗教に対する肯定的あるいは否定的態度であり、加護観念は風俗や年中行事としての宗教との軽い結びつきへの親しみや、自然に対する敬虔な気持ちであり、応報観念は願い事を叶えたり祟りや罰を与える人知を超えた存在に対する畏怖の念である。因子の信頼性に関しては、項目数の少なさにも拘わらず比較的高い値が得られた。ただし第3因子については若干信頼性が劣っている。

Table 6 宗教観尺度因子分析結果(主因子法, プロマックス回転)

項目	F1	F2	F3	共通性
<向宗教性>(4項目 $\alpha=.76$)				
3. 信仰をもっていれば、死に直面しても安らぎの気持ちを持つことができる。	.88	.05	-.22	.63
2. 宗教心のない人は、心の貧しい人である。	.62	.12	-.09	.37
10. 宗教によって、自分がこの世に生きていることが教えられる。	.59	-.11	.19	.47
1. 信仰をもつことによって、人生の目標が与えられる	.54	-.20	.27	.48
<応報観念>(3項目 $\alpha=.81$)				
7. 死者の供養をしないとたたりがあると思う。	.04	.82	.01	.69
12. 水子供養はするべきである。	-.08	.73	.08	.56
11. 仏様や神様を信心して願い事をすれば、いつかその願いごとがかなえられる。	.02	.72	.01	.53
<加護観念>(3項目 $\alpha=.65$)				
14. 山・川・草・木などに、自然の霊が宿っているように感じることがある。	-.14	-.00	.83	.58
9. 日の出を見ると、あらたまった気持ちになることがある。	.05	.12	.43	.27
15. 祖先の人たちとは深い心のつながりを感じる。	.29	.18	.43	.51
平方和	3.01	1.52	0.55	
寄与率(%)	30.01	15.15	5.48	

また4件法 (とても反対 = 1, とても賛成 = 4) による反応得点を3つの尺度それぞれにおいて合計し、項目数で除した値を個人の宗教観得点として、各因子の平均値および標準偏差を算出した (Table 7 参照)。

Table 7 宗教観尺度の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差	項目数
向宗教性	3.16	0.53	4
応報観念	2.66	0.73	3
加護観念	3.23	0.51	3

生涯発達過程における宗教との関り

宗教的教育を受けてきたものは7人 (6.1%) であった。また宗教的影響を受けた人 (あるいは物や出来事) があると答えたのは36人 (31.6%) であった。宗教についての見方や態度が大きく変わった経験があると答えたのは31人 (26.0%) であった。Table

Table 8 生涯発達過程における宗教との関り

	人数	%
宗教教育 (n = 110)	7	6.1
宗教的影響 (n = 114)	36	31.6
宗教的転換 (n = 107)	31	29.0

8はそれぞれの生涯発達過程における宗教との関りについて、関りがあると対象者が回答した人数と比率を示したものである。なお宗教的影響および宗教的転換については自由記述による回答を求めたが、本研究では「はい=1, いいえ=0」として得点化したもののみを分析の対象とした。¹⁰

b. 宗教性の概念構造間の関係性

宗教性の概念構造間の関係性を明らかにするため、Pearsonの相関係数を算出した (Table 9)。現世利益的行動は、慰霊的行動 ($r = .35$; $p < .001$) および応報観念 ($r = .22$; $p < .05$) と正

の相関を有している。また慰霊的行動は、自己修養的行動 ($r = .32$; $p < .001$) との相関を有しており、応報観念 ($r = .35$; $p < .001$) ととも中程度の相関を有している。さらに自己修養的行動と向宗教性 ($r = .24$; $p < .01$) との相関も見られた。向宗教性は、加護観念 ($r = .45$, $p < .001$)、宗教的影響 ($r = .24$, $p < .05$)、宗教的転換 ($r = .19$, $p < .05$) との相関を有していた。応報観念は加護観念 ($r = .42$, $p < .001$)、宗教教育 ($r = -.25$, $p < .01$)、宗教的影響 ($r = -.24$, $p < .01$) との間で有意な相関係数が確認された。また宗教的影響と宗教的転換の間にやや高い相関が見られた ($r = .56$, $p < .001$)。

Table 9 宗教性に関連する各因子の相関係数

	慰霊的行動	自己修養的行動	向宗教性	応報観念	加護観念	宗教教育	宗教的影響	宗教的転換
現世利益的行動	.35***	.17	-.10	.22*	-.05	.07	-.10	-.17
慰霊的行動		.32***	.13	.45***	.11	-.02	-.15	-.16
自己修養的行動			.24**	-.04	.03	.15	.10	.02
向宗教性				.16	.45***	-.02	.24*	.19*
応報観念					.42***	-.25**	-.24**	-.19
加護観念						-.03	.10	.12
宗教教育							.15	.14
宗教的影響								.55***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

3-3. 死への態度と宗教性との関係性

死への態度と宗教性との関係性を明らかにするため、相関係数を算出した。Table10は4つの死への態度得点と、宗教性に関連する各変数の得点の相関係数を示したものである。結果から、宗教行動尺度の下位因子のうち自己修養的行動だけが唯一、死への態度尺度の接近的受容 ($r = .18$; $p < .05$) と低度の相関を示した。一方、全ての宗教観尺度の下位因子は死への態度と有意な相関を示した。まず向宗教性は接近的受容 ($r = .54$; $p < .001$) と逃避的受容 ($r = .23$; $p < .05$) との相関を有していた。また応報観念は接近的受容 ($r = .28$; $p < .01$)、死への恐怖 ($r = .39$; $p < .001$)、そして逃避的受容 ($r = .21$; $p < .05$) と相関していた。加護観念は接近的受容 ($r = .42$; $p < .001$) と逃避

Table10 死への態度と宗教性の相関係数

	接近的受容	死への不安	痛みへの恐怖	逃避的受容
現世利益的行動	-.04	.02	-.04	-.13
慰霊的行動	.12	.08	-.04	.06
自己修養的行動	.18*	-.12	-.13	.09
向宗教性	.54***	-.04	-.10	.23*
応報観念	.28**	.39***	.15	.21*
加護観念	.42***	.15	.10	.27**
宗教教育	-.08	-.17	-.01	-.07
宗教的影響	.08	-.15	-.08	.05
宗教的転換	.04	-.08	-.21*	.03

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

的受容 ($r = .27$; $p < .01$) との相関を有していた。生涯発達過程における宗教との関りについては、唯一宗教的転換のみが痛みへの恐怖 ($r = -.21$; $p < .05$) と有意な相関を示した。

4. 考察

死への態度

死への態度尺度についての因子分析の結果、死への不安と死に至る過程への恐怖が区別して得られたことは、Gesserら（1987）の理論的考察を裏付けるものとなった。また死への態度尺度間の相関関係から、接近的受容と逃避的受容は死の肯定的側面を、死への不安と痛みに対する恐怖は死の否定的側面を相異なる視点より測定しているといえる。一方、死を生の一部と捉えることで受容する中立的受容が先行研究（e.g. Gesser, et al, 1987; Wong, et al, 1994）とは異なり因子負荷量の低さより排除されたことは、河合ら（1996）や隈部（2003）においても信頼性が低いことを考慮すると、わが国の高齢者の死への態度を把握するには不適切である可能性が考えられる。ただしGesserら（1987）の理論的考察の意義および先行研究における知見（川島, 2005）を考慮すれば、質問内容の精選と今後の継続的調査によってこの問題を検証していくことが望ましいと考えられる。

死への態度得点を算出したところ、死の接近的受容はキリスト教信者を対象としたArdelt（2003）や隈部（2003）の信仰心の厚い対象者の得点と比して低いことが確認された。この結果には2通りの解釈が可能である。すなわち1つには隈部（2003）が指摘するように、平生すなわち現在の生における浄土往生を説く浄土真宗門信徒を対象とした場合、「死んだら」や「死後」という表現に対する否定的反応が生じた結果であるとの解釈であり、2つには岸本（1973:188）の、現代の人々は、かつての時代のように、死後の問題について思いわずらわないとの指摘を支持するものという解釈である。また死への逃避的受容はWongら（1994）や河合ら（1996）よりも低く、苦痛に満ちた現実から解放されるために死を願うことは少ないと考えられるが、これには対象者の健康状態が大きく影響していると思われる。さらに死への不安と比較した際、死に逝く過程の痛みへの恐怖が顕著に高いことが確認されたことにより、河合ら（1996）によって示唆されつつも十分明らかにされていなかった、死に逝く過程への恐怖の顕著性が示されたといえる。

宗教性

宗教行動について、「おみくじ、易、占い」や「商売繁盛、安産」などの現世利益的な宗教行動は、金児（1995）における一般高齢者よりも低いが浄土真宗門徒代表（金児,1997）より高いことから、本研究の対象者は現世利益的な行いに関しては両者の中間に位置すると考えられる。また「祖先の霊をまつる」や「仏壇や神棚のお供え」などの慰霊的行動が高いことが伺え、とくに「仏壇のお供え」に関しては9割以上のものを行っていると答えているが、これら慰霊的行動の高さは老人大学の一般高齢者を対象とした金児（1995）においても認められるものであることから、わが国の高齢者にある程度共通する宗教行動であると考えられる。ところで本研究に協力した浄土真宗門信徒は、宗教的に奨励される「おつとめ」や「宗教関係の本を読む」といった自己の修養を目指した行動を頻繁に行なっていることが確認され、これは金児（1995）の一般高齢者よりも著しく高い。ただしこの結果には法会や仏教講座に参加するなど、普段から修養的な行動を積極的に行っている浄土真宗門信徒を対象とした、本研究の調査方法による影響が考えられる。

一方宗教観については、各因子を得点化した結果、何れの平均得点も中位点（2.5）を大きく

超えており、とくに向宗教性および加護観念の得点は著しく高いことが確認できる。すなわち本研究に協力した浄土真宗門信徒は宗教に対し非常に肯定的な態度を有しており、また加護観念とともに民俗宗教性の根幹を成す応報観念、つまりタタリの信念はそれほど強く感じていないことが明らかとなった。これは金児・渡部（2003）が述べるように、日本人の宗教性はそれが内発的な動機づけに依るものであっても、タタリ意識は払拭されていく一方で、オカゲ観念はますます強くなっていくとの見解を支持するものである。

また生涯発達過程における宗教との関りにおいて、とくに宗教的影響や宗教的転換といった宗教への自覚的な関りを有していないものが全体の約7割を占めていたことから、本研究に協力した浄土真宗門信徒は、特定の宗教行事における明示的な関りではなく、むしろ日々の生活や習俗を通じた暗黙裡の影響によりその宗教性を醸成しているのかもしれない。

さらに宗教性の概念構造間の多様な関連が見られた。とくに宗教行動と宗教観との関係性については、自己修養的行動と向宗教性、現世利益的行動および慰霊的行動と応報観念との間に相関が見られたことは従来の知見（金児, 1995; 1997; 金児・渡部, 2003）を支持するものである。また向宗教性は宗教的影響や宗教的転換によって強まるのに対し、応報観念は宗教教育や宗教的影響によって弱まるという結果は、金児（1997; 145-146）の宗教的影響を受けたものとして僧侶をあげた浄土真宗門徒代表の民俗宗教性は有意に低く、一方特定の影響者をあげなかったものはあげたものと比して真宗の信仰が著しく希薄であるとの見解を支持するものである。これにより、これまでの研究において宗教性を扱う際に欠けていた発達の視点の重要性を確認することができたといえる。ただし本研究では回答者数の少なさから自由記述内容についての詳細な分析は行えなかった。今後の課題である。

死への態度と宗教性

宗教行動尺度を構成する因子の中で「お勤めや礼拝、布教」などの修養的な行動が積極的な死の受け入れを促すことが明らかとなったが、その他の因子とは有意な相関係数が得られなかった。これはNeimeyer & Fortner（2001）やFortnerら（2000）による、宗教的な正統性と信念が死の受容と大きく関連している一方、単なる礼拝や宗教的な活動への参加は死への態度と関連していないとの見解をほぼ支持するものである。

宗教観については、全ての宗教観が接近的受容および逃避的受容と関連しており、何れも宗教観尺度の得点が高いほど死後世界への期待あるいは現実の回避から死を受け入れる傾向が見られた。ただし宗教観との関係性において、接近的受容は逃避的受容と比較してより高い相関を有している。また項目内容からしてAllport（1966）のいう「内発的intrinsic」宗教性とほぼ同義と考えられる向宗教性と接近的受容との非常に高い相関は、Ardelt（2003）の結果を支持するものである。とくに金児（1995; 1997）においては死後世界への肯定的態度と霊魂（応報）観念との間に最も強い相関が見られたのに対し、本研究では他の民俗宗教性と比して向宗教性との間に最も高い相関が見られたことは、浄土真宗門信徒というサンプルの特質によるものであろう。

一方、向宗教性と死への不安との間に負の相関が見られるというThorson & Powell（1990, 2000）の報告とは異なり、本研究では死への不安は応報観念との間においてのみ相関が見られた。すなわち現世利益的な宗教観は死の接近的受容を促す一方で、タタリの念がより顕著な場合には

死への不安を助長すると考えられる。これは金児（1997：340）が述べるように、霊魂（応報）観念が強い人は、死に対してとりわけアンビバレントな感情を抱いていることの顕れであるのかもしれない。またCicirelli（2002：207）による死に逝く過程の痛みへの恐怖と宗教性との間には相関関係が見られないとの報告とは異なり，死に逝く過程の痛みへの恐怖と宗教的転換において低度の相関が確認された。¹¹ ただし回心体験をもたらした出来事として近親者との死別体験とともに，それを契機とした宗教行事への参加や僧侶との関りが報告されていることから，宗教的転換はライフイベントそのものとそれを契機とした宗教との関りの2つの相互に関連する要因を包含していると考えられる。それ故，死に逝く痛みへの恐怖と宗教的転換とのより詳細な関係性を描くためには，質問項目の内容的妥当性を含めた更なる検討が必要である。

今後の課題

すでに幾つかの課題について触れてきたが，最後に以下の課題について述べたい。

まず自己修養的行動と宗教的転換を除いた宗教行動および生涯発達過程における宗教との関りは，死への態度との相関を有していなかった一方で，宗教観との有意な相関を有していたことを考慮すると，宗教行動や宗教との関りは宗教観を媒介することで死への態度に影響している可能性が考えられる。これは金児・渡部（2003）の死観の形成に至るモデルの示唆するところである。つまり様々な関連要因が個人の宗教行動に影響することで宗教観を醸成し，それが死への態度に影響するというものである。したがって宗教性の概念構造およびその他の関連要因を含めた，より複雑な因果図式を描くことが必要であると思われる。今後の課題である。

さらにサンプル数の少なさ故に十分な比較検証が行えなかったという問題，および高齢者の心理的・身体的負担の問題についても，より精度の高い質問紙の開発，そして多様なサンプルへの調査の展開によって解決していくことが必要である。

付記

本論文は文部科学省21世紀COEプログラム（京都大学，D-2）の補助を受けた。

謝辞

本論文の作成に際し適切なお指導を頂きました，京都大学大学院教育学研究科のやまだようこ教授，ならびに遠藤利彦助教授に記してお礼申し上げます。また分析について貴重なご助言を頂きました，科学技術振興機構・京都大学の江上園子様にも感謝の意を表します。さらに質問紙配布へのご協力ならびに研究への有意義なご示唆をいただきましたご住職の方々，そして何より貴重な時間を割いて本研究に参加してくださった対象者の方々に，この場を借りて心よりお礼申し上げます。

引用文献

- Allport, G. W. (1966) . The religious context of prejudice. *Journal for the Scientific Religion*, 5, 447-457.
- Ardelt, M. (2003) . Effects of religion and purpose in life on elders' subjective well-being and

- attitudes toward death. *Journal of Religious Gerontology*, **14**(4), 55-77.
- Cicirelli, V. G. (2002). *Older Adults' Views on Death*. New York: Springer Publishing Company.
- Clements, R. & Rooda, L. A. (1999-2000). Factor structure, reliability, and validity of the death attitude profile-revised. *Omega*, **40**(3), 453-463.
- Erikson, E. H. (1964). *Insight and Responsibility*. New York: W. W. Norton & Company.
(Erikson, E. H. (1971). 洞察と責任: 精神分析の臨床と倫理. (鑓幹八郎, 訳) 東京: 誠信書房.)
- Fortner, B. V., Neimeyer, R. A. & Rybarczyk, B. (2000). Correlates of death anxiety in older adults: A comprehensive review. In A. Tomer (Eds.), *Death attitudes and the older adult: Theories, concepts, and applications* (pp.95-108). New York: Brunner-Routledge.
- Gesser, G., Wong, P. T. P., & Reker, G. T. (1987). Death attitudes across the life-span: The developmental and validation of the death attitude profile (DAP). *Omega*, **18**, 165-177.
- 金児暁嗣. (1995). 高齢者の宗教観と死生観: 宗教は死を和らげるのか. 平成5年度ジェロントロジー研究報告, 51-64.
- 金児暁嗣. (1997). 日本人の宗教性: オカゲとタタリの社会心理学. 東京: 新曜社.
- 金児暁嗣・渡部美穂子. (2003). 宗教観と死への態度. 人文研究 大阪市立大学大学院研究科紀要, **54**(3), 85-109.
- 河合千恵子・下仲順子・中里克治. (1996). 老年期における死に対する態度. 老年社会科学, **17**(2), 107-116.
- 川島大輔. (2004). 老年期にある浄土真宗僧侶のライフストーリーにみる死の意味づけ. 京都大学大学院教育学研究科平成16年度修士論文 (未公刊).
- 川島大輔. (2005). 老年期の死の意味づけを巡る研究知見と課題. 京都大学大学院教育学研究科紀要, **51**, 247-261.
- 岸本英夫. (1973). 死を見つめる心: ガンとたたかった十年間. 東京: 講談社文庫.
- Neimeyer, R. A., & Fortner, B. V. (2001). Death anxiety in the elderly. In G. Maddox (Ed. in chief), *The encyclopedia of aging: a comprehensive resource in gerontology and geriatrics 3rd edition* (pp. 271-272). New York: Springer Publishing Company.
- Neimeyer, R. A., & Moore, M. K. (1994). Validity and reliability of the multidimensional fear of death scale. In R. A. Neimeyer (Ed.), *Death anxiety handbook: Research, instrumentation, and application* (pp.103-117). Washington DC: Taylor & Francis.
- Neimeyer, R. A., Moser, R. P., & Wittkowski, J. (2003). Assessing attitudes toward dying and death: Psychometric considerations. *Omega*, **47**(1) 45-76.
- Neimeyer, R. A., & Van Brunt, D. (1995). Death anxiety. In H. Wass & R. A. Neimeyer (Eds.), *Dying: Facing the facts*. (3rd Edition). Philadelphia, RA: Tayler & Francis.
- 岡村達也. (1983). 「死に対する態度」の研究: 青年と成人との比較. 東京大学教育学部紀要, **23**, 331-343.
- Ranst, N. V., & Marcoen, A. (2000). Structural Components of Personal Meaning in Life and Their Relationship With Death Attitude and Coping Mechanisms in Late Adulthood. In G. T. Reker, & K. Chamberlain (Eds.), *Exploring Existential Meaning* (pp.59-74). Thousand Oaks, London, New Delhi: Sage Publications.
- 辰巳有紀子. (2000). 日本の高齢者における死の不安と死生観. 聖心女子大学大学院論集, **22**, 49-64.
- Templer, D. I. (1970). The construction and validation for a death anxiety scale. *Journal of General Psychology*, **82**, 165-177.
- Tomer, A. (1992). Death Anxiety in adult life: theoretical perspectives. *Death Studies*, **16**, 475-506.
- Tomer, A., & Eliason, G. (2000). Beliefs about self, Life, and Death: Testing Aspects of a Comprehensive Model of Death Anxiety and Death Attitudes. In A. Tomer (Eds.), *Death*

- attitudes and the older adult: Theories, concepts, and applications* (pp.137-153). New York: Brunner-Routledge.
- Tomer, A., Eliason, G., & Smith, J. (2000). The structure of the Revised Death Anxiety Scale in young and old adults. In A. Tomer (Eds.), *Death attitudes and the older adult: Theories, concepts, and applications* (pp.109-122). New York: Brunner-Routledge.
- Thorson, J. A., & Powell, F. C. (1990). Meaning of death and intrinsic religiosity. *Journal of Clinical Psychology*, 46(4), 379-91.
- Thorson, J. A., & Powell, F. C. (1994). A Revised Death Anxiety Scale. In R. A. Neimeyer (Ed.), *Death anxiety handbook: Research, instrumentation, and application* (pp.31-43). Washington DC: Taylor & Francis.
- Thorson, J. A., & Powell, F. C. (2000). Death anxiety in younger and older adults. In A. Tomer (Eds.), *Death attitudes and the older adult: Theories, concepts, and applications* (pp.123-136). New York: Brunner-Routledge.
- 隈部知更. (2003). DAP-R 日本語版の内容的妥当性: 死への態度と信仰の関係. 心理臨床学研究, 20(6), 601-607.
- Wong, P. T. P., Reker, G. T., & Gesser, G. (1994). The Death Attitude Profile-Revised: multidimensional measure of attitude towards death. In R. A. Neimeyer (Ed.), *Death anxiety handbook: Research, instrumentation, and application* (pp.121-148). Washington DC: Taylor & Francis.

注

- 1 川島 (2005) は死の意味づけに関する諸概念を整理し、死への態度や死生観といった経験に対する意味づけに、意味への意思を加えた諸概念を包括する概念として死の意味づけを定義している。ただし本研究では解釈的意味に焦点化するため、死への態度と表記した。
- 2 宗教性以外の関連項目として先行研究の知見 (川島, 2005) を考慮し、性別、年齢、学歴、健康状態、家族形態を質問項目に加えた。また身近な他者の死の経験や、重篤な病や事故の経験といった死に関する経験も質問項目に加えた。ただし本研究では直接分析の対象としない。
- 3 日本語への翻訳に際し、DAP-Rの質問項目については河合ら (1996) や隈部 (2003) を、RDASの質問項目についてはDAS (Templer, 1970) を用いている河合ら (1996)、岡村 (1983)、辰巳 (2000) を参照した。また翻訳後すべての項目についてバックトランスレーションを行い、項目の対応が確認されている。
- 4 金児 (1997: 330) は、向宗教性とは常識的意味での宗教、つまり教団・教義・儀礼・戒律といった目に見える要素からなる宗教に対する態度であるのに対して、加護観念と霊魂 (応報) 観念は、日本人の心の深層に隠れている原始宗教、すなわち民俗宗教であり、当人もそれを宗教であるとは通常意識しない宗教性であるとしている。
- 5 宗教教育は仏教系中学や大学における宗教教育を意味しており、法話や行事を通じての個人的な宗教教育ではない。また宗教との自覚的関り、宗教的転換についてはそれぞれ、「あなたの現在の宗教に対する見方や態度に、とくに大きな影響を与えている人 (あるいは物や出来事) がありますか。」「これまでの人生の中で、あなたの宗教に対する見方や態度を大きく変えた出来事がありますか。」への自由記述を求めている。
- 6 分析にはSPSS ver.11.5を使用した。
- 7 死への不安が死後の非存在や人生を未完で終えることの後悔といった漠然とした怖れを表しているのに対して、死に逝く過程の痛みへの恐怖は非常に明確な対象、つまり痛みに対する怖れを表していることから、本研究では前者を不安、後者を恐怖として区別した。
- 8 初詣の対象は神社のみならず寺院であることも考えられ、その場合には現世利益的というよりは自己修養的な側面も見られる。ただし初詣は「宗教関係の本を読む」あるいは「お勤めや礼拝をする」といった自明的な宗教的実践とは異なる習俗的行為とも見做せることを考慮し、本研究では先行研究に沿い現

世利益的行動に位置づけた。

⁹ 宗教観尺度の下位因子の内的整合性はそれぞれ、現世利益的行動 ($\alpha = .51$), 慰霊的行動 ($\alpha = .46$), 自己修養的行動 ($\alpha = .49$) であった。

¹⁰ 宗教的影響についての自由記述を分析した結果、未回答のもの1名を除く114名のうち、宗教的影響を受けたものとして僧侶や信心深かった両親といった人物あるいは宗教関連の本や法話の内容といった宗教的物語の源泉をあげたのは24人 (21.1%) であり、特定の影響者との関りではなく近親者との死別や戦争の体験が自らの宗教に対する態度に影響を与えていると答えたのは12人 (10.5%) であり、宗教的影響を受けたものはないと答えたのは78人 (68.4%) であった。

¹¹ 但しCicirelli (2002) が用いたMultidimensional Fear of Death Scale (MDODS) を構成する1因子である「死に逝く過程Dying Process」は、痛みとともに暴力的な死に方に対する恐怖も含んでいる。

(教育方法学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2005年9月9日、改稿2005年11月28日、受理2005年12月8日)

Attitudes toward Death and Religiosity of the Elderly Jodo-shinshu Laymen

KAWASHIMA Daisuke

The research sheds light on the conceptual structure of attitudes toward death of the elderly people and its relation to religion, especially Buddhism and folk religion. First of all, the elderly Jodo-shinshu laymen completed the questionnaire, which consisted of the scales of religiosity and the attitudes toward death. The conceptual structure of the attitudes toward death, i.e. approach acceptance, death anxiety, fear of pain of dying process, and escape acceptance with the use of statistical analysis is shown. The conceptual structures of the religious behaviors and religious beliefs are also shown. Furthermore, ones relations to religion through the lifespan developmental process were discussed. Finally, it also demonstrates that various relations between the attitudes toward death and the religiosity exist.